

考古資料としての古代銅印について

Bronze Seals of Old Times as Archaeological Materials

田路正幸

はじめに

① 発掘調査による出土銅印の観察

② 古代銅印の出土遺跡

③ 古代銅印の鑄造技法

④ まとめにかえて

おわりに

【論文要旨】

古代銅印は、近年発掘調査による出土例が増加している文字資料の一つである。銅印については、これまでさまざまな視点からの集成作業や研究が行われてきたが、考古資料としての位置付けは必ずしも十分に果たされているとはいえない。そこで本稿では発掘調査による出土例をもとに、古代銅印の考古資料としての評価の方途を探ることとした。

古代銅印とは、主として奈良・平安時代に属するものを指すが、その編年的位置付けにはなお多くの課題を残している。出土資料では私印の範疇に属するものが大半を占めているが、考古学的観察を通じていくつかの特徴を指摘することができる。その形態には大別して「弧鈕」と「蒼鈕」があるが、鈕孔の有無や基部の装飾の相違などによってさらに細分が可能である。印面には基本的に氏もしくは名の一部が刻まれたものと思われるが、一字印のなかには複数の資料で同一の文字を有する例が認められる。出土遺跡は関東・中部地方を中心としてほぼ全国に及び、遺跡の性格には都城跡・官衙跡・寺院跡・集落跡・祭祀跡など多様なものがある。銅印の出土状況には、竪穴住居跡から検出されたものや、一部には人為的な埋置を想定されるものが認められている。

さらに鑄造痕跡をとどめる資料やいくつかの遺跡における鑄型の出土によって、これまで推定の域を出ることがなかった古代銅印製作の技術的過程や鑄造遺跡の実態に迫る手がかりを得ることが可能となった。

出土銅印のなかには赤色顔料の付着が認められるものがあり、実際に押捺に供された可能性を持つものの存在を想定させるが、今後は観念的側面を含めた多様な存在形態の可能性を視野に入れつつ、他の文字資料を含めた律令的・文字文化全体の展開のなかで評価を推し進める必要がある。